

文型の「意味」と誤用訂正

——「空が曇っているから、雨が降るはずです」

はなぜおかしいか——

太 田 陽 子

キーワード

ハズダ・文型の意味・文脈・誤用訂正・不自然さ

1. はじめに

「はずだ」を用いた表現（以下、ハズダと記す）は、日本語教材において、「確かな根拠を基に当然そうだと推測する（三枝・中西 2003：17）」といった説明が多くなされる。しかし、この説明に基づいて、学習者が次のような不自然な文¹⁾を作ってしまうことがある。

(1) 空が曇っているから、雨が降るはずである。(市川 1997：67)

この学習者は、文型の説明通りに、「空が曇っている」ということを根拠に、「当然、この後は雨が降る」という推測を行っている。それなのに、この場合にはハズダの使用が不自然に感じられるのだろうか。

この問題について、筆者は、2005年の3月～9月に、マレーシア人教

1) その文が不自然もしくは誤用であるかの判断には、前後の文章などとともに慎重な検討が必要である。しかし、ここでは、①この文が市川（1997）という誤用辞典のなかにあること。②今回の調査協力者53名のうち45名が「訂正を要する」と答えたことなどから、一応、この文を「不自然だ」ということにする。

師・日本人教師・韓国人教師を対象として、「学習者が(1)のような文を作った場合、訂正を行うか。また、行う場合は、どのように説明するか。」ということについて意見を聞いた。本稿では、その回答の検討を通して、文型の意味だけに頼った説明では不十分であることを明らかにする。そして、これまでの文法記述には、実際の運用のために必要な文脈²⁾への視点が欠けており、教師もまた、誤用訂正において、文型の「意味」にのみ着目する傾向があるという問題提起を行っていきたい。

2. 調査の概要と結果

筆者が行った調査は、以下の通りである。

時 期：2005年3月（マレーシア）／6月（日本）／9月（韓国）

調査対象：マレーシア人教師16名，日本人教師19名，韓国人教師18名

調査方法：① 質問シート³⁾を配布し、各自で回答の上、回収。

② 後日、質問シートの回答をもとに、ワークショップ形式で話し合いをする⁴⁾。

③ ②に参加できなかった調査協力者を中心に、必要に応じてフォローアップ・インタビュー（メールでのやりとり

2) ここで言う「文脈」とは、その文章・談話中で展開しているストーリーのことではなく、川口（1996）の「誰から誰にどういう目的を持ってその表現が発信されるか」という考えに基づいた記述の枠組みのことである。

3) 調査は、この問題以外にも「ハズダ」の用法をいくつかの形式で問うもので、A3用紙2枚。本稿に関係する部分は以下のような設問になっている。

Ⅳ. 次のような例文を留学生が作りました。この文はおかしいですか？

「空が曇っているから、雨が降るはずですよ。」 はい いいえ

「はい」と答えた方は、留学生にどのように説明しますか。

「いいえ」と答えた方は、上の文が適切に使われている会話を1つ作ってください。

4) 今回の調査の主な目的が在外日本語教師の意識調査にあったため、話し合いは、マレーシア（ペナン・イポー・クアラルンプールの3都市）と韓国（ソウル）のみで行った。

表1 訂正理由のタイプ別回答者数

※複数回答あり

	A	B	C	場面による	訂正せず	未回答
マレーシア人日本語教師 (16)	4	6	4	1	1	2
日本人日本語教師 (19)	3	9	6	1	1	0
韓国人日本語教師 (19)	5	11	2	0	2	0

を含む)を行う。

質問紙の筆記による回答では、本意をすべて書きつくすのは難しいので、その意図するところを②および③により、極力聞き取るようにした。また、ワークショップでは「その説明だとこういう反例もあるが?」という問いかけも行い、説明の精密化も試みてもらうようにした。

その結果、(1)の文に対する誤用訂正の態度には、大きく以下の3つのタイプが確認された。

A：根拠の性質から説明するもの

例) 目前の視覚的な根拠で推量の意味ですから、様態助動詞そうだを使って、雨が降りそうですです直すほうがいいです。(韓)⁵⁾

B：事態成立の確かさから説明するもの

例) 曇っていても必ずしも雨が降るとはいえないから、カモシレナイのほうがいい。(日)

C：ハズダで推測できる「内容」を問うもの

例) ハズダは人の意識があるので、自然のものには使えない。(マ)

各タイプの回答者の人数は、【表1】の通りである。A・B・Cの複数にまたがる解説も少なくなかった。その他、この文が用いられる場面によって訂正するかどうかが変わるという回答がマレーシア人教師と日本人教

5) 以下、調査で得たコメント(シート、ワークショップ中の発言、フォローアップインタビューを全て含む)には、末尾に発言者の国籍を(マ)=マレーシア人教師、(日)=日本人教師、(韓)=韓国人教師と載せる。言い回し等が多少不自然であってもそのまま載せることにする。

師に各1名ずつ、この文には問題はなく、訂正の必要はないという回答も計4名あった。教師の国籍や経験年数などによる傾向は、特に見られなかった⁶⁾。

3. 説明のタイプと問題点

【表1】からわかるように、(1)の文に対する説明は教師によってまちまちであり、決まった説明方法はないことが観察される。そこで、次に、なぜこのように説明の方法が揺れるのか、また、これらの説明はハズダの運用の十分な説明たりうるのかということを考えていきたい⁷⁾。

上述のA・B・Cの観点は、一般にハズダの性質として説明される、

(2) 話し手が何らかの客観的な事実、根拠を基に(→A)、そのことが当然の帰結として、必ず成り立つ(→B)という自分の判断・予想(→C)を確信的に述べる場合に用いる。(手引き：192 下線と()内は本稿筆者による)

のそれぞれの下線の箇所に着目した結果によると考えられる。この3つの観点は、いずれもこれまでの日本語研究や教師用参考書において指摘されてきたポイントであり、各教師の説明もそれに基づいたものと言える。しかし、実は、A・B・Cのいずれにも、それだけでは説明のつかない例が存在し、学生に対して十分に納得のいく説明となっているとは言いがた

6) 今回の調査は、数量的にも少ない上、経験年数や所属機関等に条件設定を設けず、あくまでも任意に集めたデータであるため、ここから傾向を読み取るには不適切である。ここでは、訂正行動の実例としての分析にとどめたいと考える。

7) 今回は、実際に学習者に対して誤用訂正を行ったわけではないので、それぞれの説明が「適切であったか」についての判断は不可能である。誤用訂正は、学習者のレベルや学習スタイル、また、当該文だけを直すのか、ハズダの使い方自体を説明しなおすのかといった訂正の目的など、様々な観点から考えられなければならないからである。ここでの目的は、「訂正の適切さ」ではなく、ハズダの指導においてどのような観点が注目・指導されているかを見ることにある。

い。以下に、それぞれについて、先行研究での指摘とその問題点を見ていくことにする。

3-1 ハズダにおける根拠の性質について

これまでのほとんどの先行研究では、ハズダの基本的な性質として、「客観的な根拠に基づく」ということが取り上げられている。そして、この「客観的」または「論理的」根拠とはどのようなものなのかについても、議論がなされてきている。

(3) 森田 (1980 : 412)

確たる根拠が話し手の脳中であって、それを拠りどころに未知・不明の現実を推測・予測する場合にしか使えない。先の例（本稿筆者注：「少し熱がある。私は風邪を引いたにちがいない。」→「引いたハズダ」は不可。）のように、現状から事実を判断したり想像したりする場合は、「はず」の領域からはずれている。

(4) 森山 (1995 : 174)

そこで考えたいのは「根拠」の質である。ハズダは、現実の事態のありようとは別に、論理的な根拠だけで判断することを表すと言えないだろうか。（中略）現実の徴候以外の「論理的根拠（判断理由）」によって判断するというところに重点がある。逆に見れば、ハズダは現場で得た情報を直接使わないという特性をもつと言える。

このような観点から、(1) の訂正にあたっての説明においても、ハズダの根拠となりうるのは「客観的・論理的なもの」であり、「空が曇っている」はハズダの根拠として適さないと考えるものが見られた。その1つは、「曇っている」のような「目で見た」事実からの判断には、ハズダではなく、「そうだ・ようだ」を選択するという説明態度である。

(5) 目前の視覚的な根拠で推量の意味ですから、様態助動詞そうだを使って、雨が降りそうです直すほうがいいです。（韓）

(6) 目で見て推定するから「～ようです」を使う。（マ）

学習者にその使用場面でのより適切な表現を提示するのは、誤用訂正の方法の1つであり、この説明の仕方が不適切であるというわけではない。しかし、これらの説明は、なぜここでハズダが使えないのかという点については、十分に説明しているとは言えないだろう。例えば、教科書の中では、次のように、視覚から得た現実の情報に基づいて、ハズダで判断を行う例も存在している。(下線は本稿筆者による)

(7) A：鈴木さんは、まだいますか。

B：カバンがあるから、(まだいるはずです)。(SFJ：172)⁸⁾

(8) アン：すみません、フェリー乗り場はどこでしょうか。

女の人：フェリーのりばですか。わたしもよくわからないんですが…。ああ、あそこにサインが出ているから (あの近くにあるはずですよ)。(モ：18)

(5) や (6) のように説明された学習者にとっては、これらと (1) との違いが明確であるとは言えないだろう。学習者への解説として、「そうだ・ようだ」と「ハズダ」の違いを「視覚」と「論理」とすることには十分な説得力があるとはいえないのではないか。

また、「曇っている」というだけではハズダを使用するための確かな根拠とは言えないことから、根拠をより精密にしたり、客観的な情報としたりすることを要請する訂正例も見られた。

(9) (くもっているだけでは) 根拠になっていないから、「だろう」がいい。(ハズダを使うためには、)「今日の午後、台風が東京に来ると天気予報で言っていましたから、午後には雨がふるはずです」を代わりに提示する。(日)

(10) 「くもっている」という理由は、当然の根拠とは言えない。不確定な自然現象に対して「はず」が使えるのは、科学的なデータや信頼

8) 用例は主に日本語教材から挙げ、その文の出現するページ番号を載せる。出典の略号については末尾の【日本語教材】参照のこと。特に記載のないものは、筆者の作例である。

を持っている人やものを根拠にしている場合に限られる。(日)

曇っているだけでは客観的な根拠にならないが天気予報ならばよいというのは、一見、説得力があるが、それでは(7)のようなカバンは客観的なデータや情報なのだろうか。こうした考え方は、どのようなものが「客観的な根拠」と言えるのか、という説明を新たに必要とすることになる。事実、教科書のなかには、「根拠に基づく」ということに触れるだけでなく、その根拠の具体的な内容に言及しようとするものも見られる。

- (11) This expression is used when the speaker conjectures or expects a result **based on his/her knowledge, a fact, a reason, or some logic.** (東海：39 太字は本稿筆者による)

- (12) 確かな根拠とは、計算・論理的思考の結果、過去の経験などである。(三枝・中西2003：20)

しかし、こうして根拠にどのようなものがくるのかの範囲を定めても、例えば a fact とはどこまでのものを言えるのか(カバンと空の様子の違いは何か)等、説明し尽くすことは難しい。こうした態度は、結局は、記述を複雑にするばかりになってしまうのではないだろうか。

また、そもそもハズダの実例には、単に話し手の直感的な印象や考えを述べるだけで、客観的な根拠に基づいたり、論理的な手順を追ったりした判断だとは言えない例も多く見られる。

- (13) (中国の若者相手に仕事をすることで)「僕も学ぶことが多いはず。忘れかけていたひたむきさとかね。」(朝日 040331)
- (14) でも、「詩なんてどうやって書いたらいいかわからない」という小学生も多いはず。そんなみなさんの参考になりそうな詩集を紹介します。」(朝日 040331)

これらは、論理的な根拠やデータに基づいてハズダが使われたのではなく、むしろ、直感的ではあるが、ハズダを選択することで、その判断を「妥当／自明なもの」として提示したいという表現態度だといえるだろう。つまり、ハズダの使用には、確かに何らかの「根拠」が感じられるものの、

それは話し手がそう判断しさえすればいいのであって、「曇った空」であってはならない理由は、特に存在しないのである⁹⁾。結局、ハズダの使用に「根拠」の客観性・論理性を求め、どのようなものならば「確かな根拠」となるのかということの説明するという方向では、ハズダの様々な用法には対応しえないものと考えてる。

3-2 ハズダにおける成立の確実さについて

(1) の文に対して、もっとも多かった説明は、後件の事態（雨が降る）が成立する確率の高さに疑問を呈するものであった。

(15) 空がくもっている状況からの推量では雨が降る可能性は高くない。

自分が推測するだけは「と思います」を使う。(マ)

(16) 曇っていても必ずしも雨が降るとは言えないから、カモシレナイのほうがいい。(日)

(17) はずは100%に近い確率があるとき、使われるのだと思う。(韓)

これらは、先行研究において説明されている、ハズダに論理上での事態成立の確実さを求める態度から判断されているものと考えられる。(下線は本稿筆者による)。

(18) 奥田 (1993 : 180)

論理の道筋を追えば、当然のこととして、あるいは必ず生じてくる出来事を判断の中に組み立てているのである。

(19) 庵 (2001 : 169)

d (本稿筆者注：「雨が降るはずだ」) は「明日雨が降る」という命題を確実に起こるもの (確信があるもの)として述べる表現です。例えば、11 (本稿筆者注：「発達した低気圧が近づいているから、明日は雨が降るはずだ」) は「発達した低気圧が近づく」→「雨が降る」という推論は極めて確実性が高いものであるとして、それを根

9) 後述のように、曇った空を根拠に判断することが十分可能な場合もある。

拠に「明日、雨が降る」ということが確実であると述べるものです。こうした解説に基づき、日本語教材では、後件の成立度がほぼ100%と言える例文が多い。

(20) 今日は日曜日だから、銀行は休みのはずです。(外：241)

(21) シャツが2200円、靴下が800円ですから、合計3000円のはずです。(東海：39)

しかし、ハズダは、後件の事態が「必ず成立する」のではなく、「必ず成立するものとして話し手が発話時点で判断している」というだけのことなのである。この点は先行研究でももちろん指摘されており、例えば(18)の奥田(1993)もそのすぐ後に、次のように述べている。

(22) 奥田(1993：180)

それがリアルに存在しているか、それともリアルな存在へ移行するか、ということは、判断する人にとって確信的であるとしても、まだ確認されてはおらず、そうなるのが当然であることを、文は主張するにとどまる。

ところが、教育現場では(20)(21)のような例を用いる中で、「話し手の判断上の成立」と「実際の成立」とを明確に分けることなく教えられているのではないだろうか。「必ず成り立つこと」にしか使わないという説明は、ハズダの用法を正しく反映しているとは言えない。

(23) A：ミラーさんは来るでしょうか。

B：来るはずですよ。きのう電話がありましたから。(み：175)

(23)で、もしも必ずミラーさんが来ると言えるのであれば、「来ますよ」と断定するであろう。実は、電話があったからと言って、必ずしも来るかどうかはわからない。そうした来ないかもしれない可能性もあるなかで、自分は「昨日の電話」を根拠に「来る」と判断したことを示すために、ハズダが用いられているのである。したがって、(24)のような、必ず成立するとは決して言えないような場合でも、話し手が強く確信してさえいれば、ハズダの使用は可能である。

(24) 私はこんなにきれいなんだから、絶対、大女優になれるはずよ。

きれいだからといって、大女優に必ずなれるものではないだろうが、本人の論理上それが成立している場合である。このように話し手の「勝手な思い込み」であってもハズダを用いることができる以上、(1)の場合も、たとえその成立が確実ではなくとも、「あんなに空が曇っている」と思った話し手が、そのことから「もうすぐ雨が降る」ことに対して強い確信を持って判断したのであれば、ハズダで述べてもかまわないのではないだろうか。

このようなハズダについて、必ずそうだと言えないことを理由に(1)を誤用だと説明し、常に(20)(21)のような必ず100%だと言える例文のみで練習することは、ハズダと断定との違いを曖昧にし、なぜハズダを使用するのかをわかってわかりにくくしてしまう。成立が確実であると論理の上で考えるということは、裏を返せば、実際にはどうなのかわからないということと隣り合わせなのだとと言える¹⁰⁾。そのようなハズダを成立の確実さで説明していくことは、必ずしも説得力を持った説明とはなりえないように思う。

3-3 ハズダで推測できる「内容」について

上記の2点以外の観点からの説明として、「天気」のような自然現象にはハズダは使えないとする回答もいくつか見られた。

(25) ハズは人の意識でとらえるもので、自然のものには使えない。

(マ)

(26) 天気のような変化が一定でないものは、単に予測でしかないので使われにくい。(日)

「人間が論理でとらえられるものではない」という考え方だと思われる。

10) 森田(1980)にも『『はず』と述べる裏側には、予想した解答に対する話し手の自信と、その解答がはたして正しいかどうか未確認・未証明であることと、二つの要素が含まれている』とある。

天候のように話し手が「確信できないもの」にはハズダを用いないとする説明も、これまでの解説のなかに確かに見られた。

(27) (生：別冊 62)

確かな証拠のないもの、確信できないものには使いにくい。この場合には「だろう」「に違いない」を使う。例) ?もうすぐ雨が降るはずだ。

(28) 富田 (1997 : 231)

「はず」という言葉は、このように、根拠となる確かな事実、あるいは前例や真実があって、九分九厘とはいえないまでも、相当に確信がある事柄について、それが順当・当然であると判断されるというときに使う言葉です。ですから、梅雨どき、連日、雨が降って、いくら次の日に降る確率が高くても、予想である以上は、「明日は雨が降るはずです」とは言いません。

しかし、(19) の庵 (2001) にも見られるように、ハズダが天候に使われることもないわけではないし、下記のような場合は、実例を見ても決して不自然ではない。

(29) もう二月で、これからは暖くなる一方、というのではけっしてない。雪はこの先、まだかなり降るはずなのだ。(志)

(30) 天気予報によると今日は雨が降るはずなのに、どうやら我ら「山と温泉の会」には相当強力な晴れ男(女)がいるらしい。(山)

それでは、(1) に対して感じられる違和感の原因はどこにあるのだろうか。そして、どのような場合ならば、「天気」でもハズダが用いられうるのであろうか。また、同様にハズダが使われにくいものには、「天気」のほかにもどのようなものがあるのだろうか。こうしたことを十分に検討することなく、(1) に対して、「天候」のような自然現象には使わない、といったハズダで推測できる「内容」の面から不自然さを説明するだけでは、単に場当たりの指摘にとどまってしまうのではないだろうか。

4. 「文脈」意識の必要性

以上、A：「根拠の性質」、B：「事態成立の確実さ」、C：「判断される内容」の観点は、いずれもハズダの意味記述の上で重視されてきたポイントではあるが、その説明内容をさらに詳細にしていくという方向では、記述を複雑にするばかりで、結局は(1)の不自然さを根本的には解明できないということが観察された。これらの記述だけでは、産出のための十分な情報足りえていないことがうかがえる。それでは、(1)の不自然さは何によるものであり、どのように説明することができるであろうか。本稿では、意味の精緻化ではなく、その表現はどんなときに、何のために用いられるのか、すなわち「文脈」という観点からの見直しを試みることにする。

4-1 「空が曇っているから、雨が降るはずです」の不自然さの原因

ここで、もう一度、Cの天候に対してハズダが使われることについて考えてみることにする。

今回の調査では、調査対象者52名のうち12名が「天候のようなもの」にハズダは用いられにくいというところに、不自然さの原因を見た。一方で、(29)(30)のように天候にハズダが使われている実例もある¹¹⁾。その実例をもう少し詳しく見てみると、いずれも話し手が「雨や雪が降る」という判断を現実の状況と対比的に提示していることがわかる。

(29) もう二月で、これからは暖くなる一方、というのではけっしてない。雪はこの先、まだかなり降るはずなのだ。(志)

一般的な想定「これから暖くなる」 ⇔ 自身の判断(ハズ)
「まだ雪が降る」

(30) 天気予報によると今日は雨が降るはずなのに、どうやら我ら「山

11) 計4箇所のワークショップでも、この実例に不自然さを唱えるものはいなかった。

と温泉の会」には相当強力な晴れ男（女）がいるらしい。（山）

予報からの判断（ハズ）「雨が降る」 ⇔ 実際の天候「晴れ」

(29) は、聞き手によって一般的に想定される「これからは春に向かうのだらう」という考えを否定して、ここに住む自身の経験を踏まえた見込みを述べるものであり、また、(30) は天気予報であらかじめ与えられていた「雨が降る」という予想に反して、実際はいい天気だったという場合である。つまり、内容が天候であるか否か、といったことではなく、現実との対比の中で、雨や雪が降るという判断を話し手が積極的に述べるべき状況さえ整えば、天候にもハズダが自然に用いられることが分かる。つまり、「どんなときに・何のために」ハズダが使われるのか、という文脈的な条件がハズダの適切な使用に関わっているのである。逆に言えば、(1) の例も、文脈が整えば、正しい文だと言えることになる。例えば、何らかの事情で、話し手が「雨が降る」ことの確実さを主張しなければいけない立場にある、以下のような状況では、不自然さはさほど感じられない。

(31) 場面1 —— 祈祷師の雨乞い

【祈祷師が雨乞いの祈りを行なったが、一向に雨が降ってこない】

村人：雨、降らないじゃないですか。

祈祷師：そんなことはありません。ほら、東の空を御覧なさい。空が曇っているから、まもなく雨が降るはずですよ。まあ、見ていなさい。

今回の調査においても、「不自然ではない／コンテクストによる」という回答が見られ、2名の調査協力者が(1)が自然に用いられうる状況を作成したが、いずれも以下のように、「地元のことを良く知らないキャリア警視に、地元の警官がその土地の天候変化の傾向を伝え、雨にまぎれて人質を救出することを進言するために」「なかなか予報が当たらない気象予報士がむきになって」など、「雨が降る」という自己の判断を、その成否は未定ながらも積極的に主張するべき状況を考えていた。

(32) A = キャリア組警察官

B = 地元警察官

A : 人質を取られていては、身動きができない…。

B : 今、東の空が曇っているから、もうすぐ雨が降るはずですよ。

ここの雨は、たいてい、激しいスコールになって、視界が悪くなります。そのときを見て、人質を助け出しましょう。(日)

(33) A = いつも予報がはずれる気象予報士 (石原良純)

B = ニュースキャスター (安藤優子)

A : 明日の予報はズバリ雨です。

B : 本当に当たるんでしょうねえ？

A : 空が曇っているから、雨が降るはずですよ！！

B : もっと気象予報士らしいこと言ってください。(日)

すなわち、(1) のようなハズダが適切に用いられるための文脈は、以下のようにまとめられる。

(34) 【ハズダの文脈条件】¹²⁾

① 現実にはどうなるかはわからない。

② しかし、話し手にはすでに確信を持った判断がある。

③ 話し手には、その判断を示すことにより、聞き手を納得させたり、行動を促したりなどするために、その判断の妥当性を主張すべき動機がある¹³⁾。

しかし、今後の天気について妥当性や確実さを主張するというのは、(31) ~ (33) の例を見てもわかるように、非常に特異な状況であり、曇っている空を見ながらこのあと雨が降るのではないかと心配しているとい

12) これはハズダの未確認用法の場合である。ハズダにはこの他にも大きく3種類、細かくは6種類の文脈が設定されうる。詳しくは、太田 (2005) 参照のこと。

13) ハズダが妥当性を主張することについては、藤城 (1997 : 155) に「ハズダは納得のいく理由の存在を主張することで、結果的に、命題を真と認識することの妥当性を主張すると考えられる」と指摘されている。

う状況では、一般的には、そうした事情は想起しにくい。この点にこそ(1)の不自然さがあるとは言えないだろうか。3-3で扱った「天気のようなものには使わない」といった回答は、これからの天気を心配するという一般的な状況と、ハズダによる当然性の主張とのズレを意識したものであったと分析できよう。言い換えれば、(1)の不自然さは、構文の意味に問題があったのではなく、文脈という極めて語用論的な問題であったのだと言えるだろう¹⁴⁾。このように、ハズダの適切さは、「根拠があり」「当然そうなると考えられ」「確信を持っている」という構文的な意味を満たすだけではなく、そのようなものの述べ方はいつ、どんな場合に用いられるのかという文脈的な条件に合うものとして考えられなければならない、状況や話し手の発話意図を抜きにしては説明できないものなのである。

4-2 現行教材・教授方法の問題点

話し手がハズダを使う動機や意図は、常に文脈とともにある。ところが、これまでの教材や文法解説書においては、「どんなときに」「どのように」「何のために」ハズダを用いるかについて記述されているものは見られない。そして、それらの説明を参考とする教師もまた、ともすると、文型の意味にのみ着目した説明をする傾向があることが、今回の調査により観察された。最後に、教材の練習や例文の問題点について具体的に見ていくことにする¹⁵⁾。

第一の問題点は、一文単位での例文や練習の提示にある。例えば、
(35) 日本語の三年になれば、日本語の新聞が読めるはずです。(中：
173)

14) 深田(1992)では、文法性(grammaticality)と容認可能性(acceptability)とを区別し、母語話者が直感的に「逸脱」を判断するのは文法性ではなく、容認可能性に関するものだと指摘した上で、言語の記述には文法的側面と語用的側面の両面が必要であると述べている。

15) この問題について、詳しくは太田(2004)を参照のこと。

という例文の場合、単にこの例文を単独で出し、一般的な「日本語の三年生」の日本語力から新聞が読めると判断することだけを理解するだけでは十分でない。この文は、これから日本語を学ぼうとする学生の「いつ頃、日本語の新聞が読めるようになるか」という質問に対する答えとなる場合もあれば、日本語の新聞を読む宿題を「難しすぎる」と言ってやってこない学生に対して教師が非難するときに用いられることもあるのである。こうした文脈の中での使われ方を理解しなければ、ハズダという表現を身に着けたことにはならないのであり、単文での例文提示では不十分であると言える。

また、多くの教科書では次のような問答形式の練習も取り入れられている。

(36) 荷物は今日着きますか。

→きのう宅配便で送りましたから、（ 着くはずです。 ）

彼女は来るでしょうか。

→きのう出席の返事をもらいましたから、（ 来るはずです。 ）

(み：174)

しかし、実はこの形式の練習においても、実際に学習者が行っているのは、ハズダを使って答えることが予め決まっている中で、前件の根拠から後件の内容が肯定か否定かを判断するという、結局は単文の場合と同じ「根拠→推測」の練習に終わってしまっており、発話者の意図や発話の状況は問われない。このような練習では、なぜここでハズダを用いるのかを理解しないまま、文型の意味の練習だけを繰り返すことに変わりはない。

このように、現行の教科書や教師用参考書では、「根拠に基づく判断を述べる」という文型の意味のみに着目し、ハズダが「どんなときに」「どのように」用いられて、「何をするのか」について十分には触れられておらず、練習の場面設定にも「文脈」が考慮されているとはいいがたい。その結果がハズダを使用する動機のない(1)のような場合での使用を誘発してしまう一因となっているのではないだろうか。事実、学習者の作例に

は、文法的には正しい表現でも、運用上、不適切な使い方をしているものが少なくない¹⁶⁾。

(37) A：どうしたんですか。

B：頭が痛いです。

A：？薬を飲めば、病気はすぐに治るはずです。

B：ありがとうございます。 (中国人学生)

(37) は教科書にもある例文をそのまま使用して作った談話であるが、この学習者の発話意図は「薬を飲んだほうがいいですよ」という助言であって、薬の有効性を主張したいわけではない。このような発話は、場合によっては、薬を飲んでいない相手に対し、非難めいて冷たく聞こえてしまうこともあるだろう。

(38) A：田中さんは明日の会議が出席しませんね。

B：え～、どうして。

A：？さっき電話がかけてきた。明日は用事があるので出席しないはずだ。

B：そうですか。 (中国人学生)

(38) も、電話で用事があると言っていたことを根拠に、明日、田中という人物が来ないことを述べており、教科書の例文がほぼそのまま使用されている。しかし、この学生の発話意図は、田中の欠席を知らない他の友人に対して、「出席しないそうだ」と述べる伝言であった。もしも、ハズダを用いるのであれば、実は、時間になっても田中が現れず、仲間内で田中が来るかどうか話題となっているが、誰も判断の根拠を持たない中、自分だけが「電話」という根拠を持って判断ができるといった状況でなければならぬ。

このように、教室では根拠に基づいて判断する場合に用いると教えなが

16) いずれも筆者がアンケート等の方法で実際に学生に接して採集した談話作成例である。発話意図は本人に確認を行った。表現に文法的な誤りがある場合も、そのまま掲載する。

ら、学習者が実際にその通りに使用すると不自然になるということが、少なからず起きていると思われる。こうした事態は、もっと積極的に文脈に目を向けることにより、避けられるのではないかと考える。

また、教師側にとっても、これまでの教材のあり方では、不十分であるようだ。教師用参考書である市川（2005）には、ハズダの項目の「学習者はどこが難しいか。よく出る質問」の項に、

(39) 「～はずだ」をいつ使えばいいのか、使い方がわからない。(市川 2005：154)

が第一にあげられており、また、今回の調査においても、

(40) 状況設定が難しい。言い切りやダロウを使ってもいいようなものでは、違いの説明が難しい。(日)

(41) あまり使わないので、いつ使えるか混乱する。(マ)

(42) ハズダを使える場面をわからせるのが難しい。状況が考えにくい。(マ)

といった声が聞かれた。この点では、教科書や教師用参考書が十分な役割を果たせていないことがうかがえる。また、(1)の誤用説明の回答に見られたように、「この文型がなぜおかしいか」を説明しようとする場合にも、参考にするべき文法解説書や先行研究の文献が単文レベルでの意味記述にとどまっていたり、教師の説明もどうしても意味の精緻化の方向へと進んでしまうであろう。教科書での提示においてはもちろん、各教師が導入の際に学習者に応じた適切な場面設定を行ったり、学習者の産出した表現の適切さを検証したりするためにも、教育のための文法記述では、文型の意味だけではなく、それが「どんなときに」「なんのために」用いられるのかという文脈に関する視点を取り入れていくべきであると考えられる。

5. おわりに

本稿では、(1)「空が曇っているから、雨が降るはずです。」という文を例に、教師がどのような訂正を行うかを調べた調査結果を通じて、文型の

意味に頼った説明だけでは解決できない問題があることを検証し、その解決方法として、文脈の中で考えるという観点がもっと重視されるべきではないかという提案を行った。こうした「文脈」意識の必要性はこれまでもしばしば指摘されていながら、まだ十分に記述が進んでいるとは言えず、実際には各教師の語感にまかされ、教科書や教師用指導書には取り入れられていないのが現状である。また、今回の調査で、教師が誤用訂正を行う際にも、使用文脈に目を向けるよりは、意味の精緻化に重きを置く傾向があることも観察された。本稿の目的は、文型の意味だけに頼る説明の限界について問題提起をすることにあつたため、ハズダのすべての使用文脈を明らかにする試みは別稿に譲るが¹⁷⁾、今後は、「ハズダ」だけでなく、類義とされる「カモシレナイ」や「ダロウ」など他の判断のモダリティ表現も含めて、「どんなときに・何のために」という文脈記述をより明確にし、教育に結び付けていきたいと思う。そうすることで、使い分け等の問題についても、状況の設定や発話意図の違いという文脈的観点から記述しているのではないかと考えている。

付記：①本稿の調査及び考察にあたっては、マレーシア日本語協会（クアラルンプール）、ペナン日本語協会（ペナン）、ペラ馬日友好協会（イポー）、高麗大学教育大学院文法クラス（ソウル）の先生方を中心に、多くの先生方に大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

②本研究は、平成16年度早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2004A-395「コミュニケーションに役立つ文法記述のための基礎研究」）によるマレーシアでの調査、および、平成17年度科学研究費補助金（若手研究B 課題番号17720129「運用力につながる文法記述のための基礎研究—「非断定」表現の文脈化と教材化—」）による韓国での調査の一部です。

17) ハズダの使用文脈の全体像については太田（2005）にて分析・記述を試みている。

参考文献

- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク, 169-170
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』凡人社, 66-69
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク, 154-160
- 太田陽子 (2004) 「文型指導における「文脈欠如」の問題点—日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』17
- (2005) 「文脈から見たハズダの機能」『日本語教育』126, 日本語教育学会
- 奥田靖雄 (1993) 「説明 (その3) —はずだ—」『ことばの科学6』むぎ書房
- 川口義一 (1996) 「日本語指導の文脈化」『日本語教育異文化間コミュニケーション』北海道国際交流センター
- 富田隆行 (1997) 『続・基礎表現50とその教え方』凡人社, 231-235
- 深田 淳 (1992) 「日本語研究と急進派語用論」『日本語研究と日本語教育 竹内俊男教授退官記念論文集』名古屋大学出版会
- 藤城浩子 (1997) 「「判断のモダリティ」についての一考察」『日本語教育』92, 日本語教育学会
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2—意味と使い方』角川書店, 409-413
- 森山卓郎 (1995) 「ト思フ, ハズダ, ニチガイナイ, ダロウ, 副詞~, ϕ」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』宮島達夫・仁田義雄編

【日本語教材】引用順・() 内は本稿における略称

- 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現—モダリティ・終助詞—』(2003) 三枝令子・中西久実子, スリーエーネットワーク (三枝・中西2003)
- 『みんなの日本語初級Ⅱ 教え方の手引き』(2001) スリーエーネットワーク (手引き)
- 『Situational Functional Japanese Vol.3 Drills』(1992) 筑波ランゲージグループ, 凡人社 (SFJ)
- 『モジュールで学ぶよくわかる日本語』(1998) コーベニ澤子・高屋敷真人・本間直子, アルク (モ)
- 『日本語初級Ⅱ 文法説明英語版』(2000) 東海大学留学生教育センター, 東海大学出版会 (東海)
- 『初級日本語』(1994) 東京外国語大学留学生日本語教育センター, 凡人社 (外)
- 『みんなの日本語初級Ⅱ』(1998) スリーエーネットワーク (み)
- 『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』(1998) 鎌田修・椛本総子・富山佳子・宮谷敦美・山本真知子, The Japan Times (生)
- 『中級の日本語』(1994) Akira Miura, Naomi Hanaoka, McGloin, The Japan Times (中)

【上記以外の用例出典】

(朝日) 朝日新聞 (数字は掲載年月日)

(志) 志水辰夫公式ホームページ

<http://www9.plala.or.jp/shimizu-tatsuo/sub5-0301-03.html>

(山) 山と温泉の会活動記録 www.sfk21.gr.jp/jjc/yama_onsen/cont02.html

(HP 参照日：2005年6月15日)